

平成 31 年 4 月 29 日から令和元年 5 月 12 日までの日程で、関東高等学校体育大会サッカーの部千葉県予選が行われた。32 チームが千葉県代表の 2 枠をかけてトーナメント方式で試合を行い、優勝は中央学院高校、準優勝は専修大学松戸高校、3 位は暁星国際高校、敬愛学園高校という結果に終わった。まず今大会、リーグの категорияや順位が結果にそのまま反映しないことが多かったように思う。もちろん、サッカーはどんな可能性もあるスポーツであるが、千葉県全体でチーム力の差が小さくなってきたことの表れだろう。具体的には、守備がしっかりと整備され、相手の攻撃を粘り強く封じ、鋭いカウンターを繰り出せるチームが増えた。もうひとつ要因があるとすれば、日程上の問題である。4 月からリーグ戦が毎週行われ、4 月 29 日から 3 日か 2 日毎に予選が進み、準決勝と決勝は連戦、5 月 19 日にまたリーグ戦が行われるチームもある。気温も年々上昇傾向にある。年間通じて全ての試合でベストパフォーマンスができるチームは、プロでも育成年代でも世界に存在しない。選手たちは、未来あるユース年代であり、アーティストであり、守られなければならない存在だ。私が指導させていただいている専修大学松戸高校は、選手のコンディション等を考えて、1 回戦から全ての試合スタメンを変えてこの大会に臨んだ。勇気のいることであるが、サッカーは量よりも質を優先すべきであり、選手たちは回復する必要がある。千葉県全体で考えていかなければならない問題であると感じた。

試合内容については、先ほど述べたように守備が徹底されているチームが多く、特に「攻撃から守備」への切り替えが早く、ポジションバランスをすばやく整え、全員がハードワークをしていた。チームのゲームモデルがはっきりしている分、戦術がタスク化され、選手は余計なことを考えずにシンプルにプレーできる。攻守のアクションが早いスリリングなゲーム展開が多く見られた。

一方で攻撃のプレーの質には課題がある。奪ったボールをすぐに失ってしまう場面、簡単な技術的なミスでボールを失ってしまう場面が多く見られた。そのような中で、優勝した中央学院高校、3 位の敬愛学園高校のように、個人技術の質にこだわり、プレッシャーの中でも良い判断をし、技術を発揮できるチームが好成績をおさめたことはすばらしいことである。やはりサッカーの育成年代では、もっと「個」の技術を大切にしていくなさと思う。もちろん「チーム戦術」も大切な要素だが、いくら綿密なゲームモデルを作ったところで、個人のしっかりとした技術があってこそそのモデルである。また、そのモデル通りにはいかないことも多いのが、サッカーというスポーツだ。世界のサッカーでも、モデル作りにあてはめられたチームではなく、状況やスコア、環境、相手によって柔軟に戦い方を変えられ、その時々で適切なゲームが行えるチームが頂点に立っている。状況に合わせて技術を発揮できる、創造性を発揮し表現できる「個」の育成は千葉県に留まらず、日本全体の課題であると思う。関東大会の県予選から、大きな課題が見えたのではないだろうか。

なお、大会の運営については、会場役員や審判、記録の方々を始め、多くの方々のご協力によって進められた。大会運営に関わっていただいた全ての方々に感謝の意を表すとともに、中央学院と専修大学松戸の関東の舞台での活躍を期待し、総評とさせていただきます。